

令和6年産米 今後 取り組むべき5つの高温対策

夏秋作業編

記録的な高温に見舞われた令和5年産米では、乳白粒等の高温障害が多発し、品質・収量の低下を招く結果となりました。

気象庁の発表では、今年の夏も昨年同様に高温となることが予想されています！

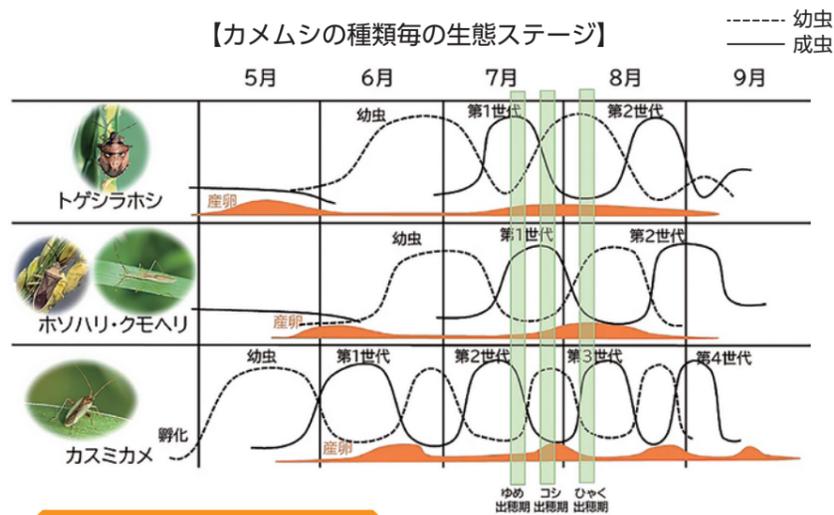
品質・収量の維持のためには、今年も昨年同様に入念な栽培管理が必須となりますので、今後収穫までに留意すべき作業ポイントを確認いただき、良品質米の生産・収量の確保に努めましょう！

ポイント

1 カメムシの生息密度低減のため 畦畔除草の徹底・防除剤の適期散布を!!

令和5年の高温によりカメムシの生体数が増加したことに加え、今年の暖冬により越冬したカメムシも多いと想定され、例年以上にカメムシ対策が重要となります！

穂が出るまでに畦畔除草を入念に行い、圃場近辺にカメムシの棲み処を作らないこと、本田に侵入したカメムシを防除剤でしっかりと退治することを徹底し、斑点米の発生減に努めましょう！



対 策

① 畦畔・農道の除草を「6月中」に行う！

さらに7月上旬にも除草を行うことで、カメムシ類の発生密度は低下します！

② 防除剤の「2回」散布を徹底！

カメムシに効果的な防除時期は「出穂後7～10日後」と「1回目防除の7日後」。生息数が多い場合は、「2回目防除の7日後」にももう一度散布を行うとより効果的です！

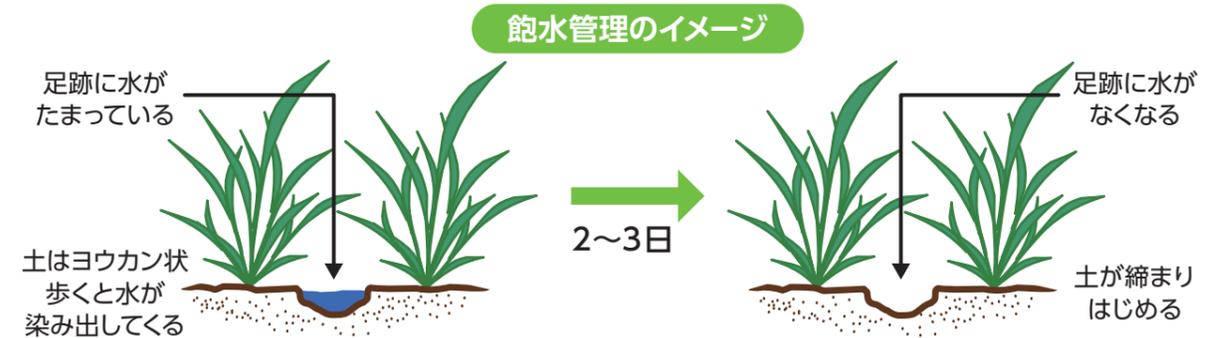
③ 本田除草の徹底！

カメムシは特にヒエの種子を好むため、本田にヒエがあるとカメムシ類の本田侵入が助長される恐れがあります。畦畔除草と併せて本田除草も徹底し、ヒエ発生の防止に努めましょう！

ポイント

2 中干し終了～収穫5日前まで飽水管理！

出穂後に高温と水不足が重なると、乳白粒・胴割粒・不稔の発生率が高まります。中干し終了後の水管理は、田面を①乾かさない、②ずっと水を溜めない、③すぐ水を落とさない、を心掛け**飽水管理**に努めましょう！



対 策

① 中干し終了後は田面の水分状態を常に「足跡に水が残る程度（飽水状態）」に保つ！

目安は「3日に1回通水」。また夏期は夜間も高温となる日が続くため、可能であれば夜間通水を行うことが「稲体の体力消費を軽減＝品質の向上」に繋がります！
※ただし、長期湛水は根を傷めるので行わない！

② フェーンなど異常高温が予測される場合は必ず通水！

フェーン現象等により急激な乾燥状態に見舞われると、稲体からの急激な蒸散により高温障害が発生する確率が高くなります。短期間の異常高温が予測される場合は一時的に湛水し、稲体の乾燥を防ぎましょう！

③ 収穫5日前まで（できる限り直前まで）飽水管理！

高温時には胴割粒の発生が懸念されるため、収穫直前まで**できる限り落水せず**、飽水管理に努めましょう。

ポイント

3

一発肥料を散布した圃場でも**上乘せ追肥**を！

※ただし圃場の状況に応じて

高温登熟に遭遇すると、稲は呼吸による養分の消費が激しくなり、籾へのデンプン蓄積が少なくなることで、乳白粒等が多く発生します。

一発肥料を散布した圃場でも、登熟期の稲の体力を維持するために、圃場の状態を確認しながら追肥の施用を検討しましょう！

対 策

「稲の出穂10～7日頃」の葉色が葉色板で「4.0未満（ゆめみづほは5.0未満）」の場合は「**窒素1.0kg～2.0kg/10a**」程度の追肥を施用！

- ①田植え時に、基肥一発肥料を基準量より減量して施用した場合は、必ず追肥を施用してください。
- ②出穂期以降の施肥（実肥）は、玄米タンパク含有率が増加するので施用しないで下さい。

ポイント

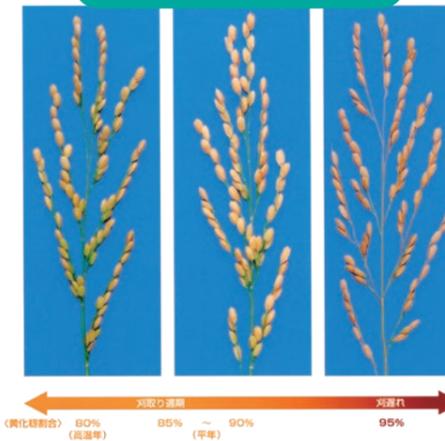
4

収穫適期に刈取を！

稲の刈取適期を正しく把握し、適期に収穫作業を行うことで米の品質向上につながります。刈取が遅れると立毛中の胴割粒が増加する場合があります、また、極端に早い刈取は未熟粒が増加します。

出穂後の登熟速度は、登熟期間の気温に左右され、**高温条件下では登熟が促進され、登熟期間は短縮しますので籾の黄化率を確認して適期刈取を行って下さい。**

黄化率の目安



対 策

籾の80%が黄化した時期から刈取を開始！

- ①通常年の刈取適期は「籾の85～90%」が黄化した時期ですが、高温登熟の場合は胴割粒の発生が懸念されますので、籾の80%が黄化した時期から刈取を開始して下さい。
- ②穂軸が青くても、籾の黄化のみで刈取適期を判断して下さい。

ポイント

5

収穫後は速やかに**秋起こし**！

「秋起こし」のメリット

① 養分や有機物が補給される！

稲わらに含まれるケイ酸等の養分が補給されるほか、有機物が補給・腐熟されることで地力の素となる腐植の増加に繋がります！

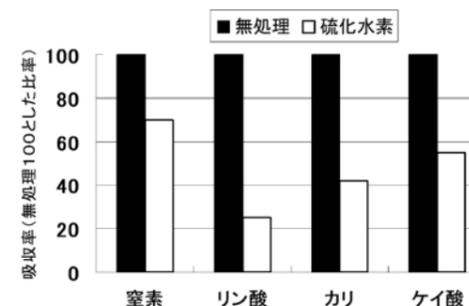
② 翌年春期の圃場のガス湧きを軽減！

刈取後に高温が続くと、収穫後の稲が再生し出穂した穂、通称「ひこばえ」が多くなります。多発したひこばえを放置し翌年春にすき込むと腐熟が進まずガス湧きは例年よりも多くなります。秋起こしを行うことで、稲わらの分解が促進され、根腐れの原因となるガス（硫化水素）の発生を軽減することができます。

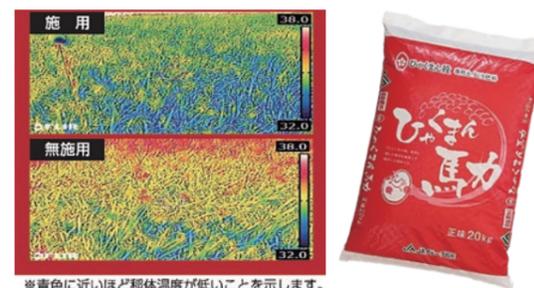
③ 塊茎雑草（クログワイ・オモダカ・ウリカワ等）の塊茎根を死滅！

塊茎根は秋起こしにより土壌表面に露出させることで、冬期の低温と乾燥状態にさらすことで死滅します。

【ガス（硫化水素）による養分吸収阻害】



【ケイ酸施用による稲体温度の違い】



※青色に近いほど稲体温度が低いことを示します。

作業のポイント

① 稲刈り後、できるだけ早い時期に秋起こし！

有機物を分解する土壌微生物は気温が高い環境下で活動が活発になります。「稲刈り後1ヶ月以内」を目標に、遅くとも「10月中旬」までに秋起こしを行いましょう！

② ロータリーの回転は「ゆっくり」、深度は「浅く」！

車速は1.5～2.0km/h、深度は5cmを目安に。秋起こしは「浅耕」、春起こしは「深耕」で！

③ 耕起の前に「土づくり資材」を散布！

令和7年産米にむけ十分なケイ酸を補給するためには「土づくり資材」の散布が欠かせません。また土づくり資材にはアルカリ分も含まれているため、稲わらの分解を助ける効果もあります。秋起こしと併せて、是非土づくり資材の散布を！